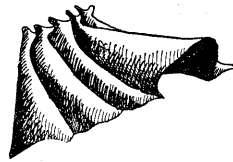


## 私の保育



志熊淑子

私は、小学校の教師になるつもりだった。それが幼稚園にお世話になることになって早くも二十年という月日を過ぎた。

私が勤め始めた頃は、幼稚園は今のよう一般化してはいなかったし、社会の認識も浅かった。私もまた幼稚園が何のために存在し、そこで何をするのかなど幼稚園について勉強もしなかったし、ほとんど無知であった。

何をするかが決っていなくて教師に任される部分の多い幼稚園、時間帯のはっきりしない幼稚園、熱心になればきりがなく怠けようとすればいくらでも怠けられるような幼

稚園、こうした中で私は自分のしていることの価値づけができず、むなしさを感じることがあった。しかし私が思い惑っている間にも子どもとの日々は確実にその日教を増していく。考えるのはよそう。子どもを育てているのは教師である私だけではない。親もそして地域社会もある。とにかく今私ができることが子どもにとって何らかの意義があると考えよう。そう思うことにした。

その頃の子どもたちの一日は、朝は九時頃まで自由に遊ばせる。ここでは「粘土は出さないで、はさみも出さないで、外へ出なさい」九時頃全園児を一堂に集めて「朝の

会」をする。改めて「みなさんおはようございます」とやるのである。その後、クラス毎に自由に遊ばせたり、一斉の活動をさせたりする。自由に遊ぶについては朝と同じ規制の多い中で、一斉の活動では「これから絵をかきましよう。かかなくてはいけません。友達もみんなかいているのだからあなたもかきましよう。勝手なことをしてはいけません。最後までがんばりなさい。できたら外へ出て遊ばなさい……」といった状態で、小学校でいう休み時間がうんと長くてその中に授業のような活動がひとつ或はふたつと組み込まれたものという考え方であったと思う。

このような生活の中でも子どもが得るものはあったと思うし、何よりも私は若さでせいっぱいかゝわったという意味でもあれはあれでよかったと思いたい。しかし、よく考えてみると、管理しやすいように、私の狭い枠の中にすべての子どもをはめ込もうとしていたように思う。すべての子どもを同じようにしようとし、同じことを同じように期待し要求して枠からはみ出さないように気をつかい、教師の指示どおりに動き、よけいな回り道をしないようにどうルールを敷くかを考えていたようだ。そして、ひとりひとりの発達をみつめること、そこでその子にとって必要な

ことは何かを考えること、個性を尊重し伸ばすこと、内面的な気持を思いやること、創造性や自主性を重んじることなど、幼児の教育において考えなければならぬ大切なことに何ひとつ気づいていなかったような気がする。

しばしば研究会などへも出かけたが、幼稚園の存在理由など私の疑問は解けなかったし、指導者といわれる人達は、ほとんどが幼児に接したことの無い人であったということもあり、何かが通じない、そうじゃないんだという思いにかられることも多かった。そのところを、ことばで言い表わしたり、人に通じるように話したりすることは、今もそうなのだが、難しい私の力は及ばなかった。

倉橋惣三著『幼稚園真諦』を読む。この頃から幼児との生活にそれまでと違ったおもしろさを感じるようになった。私の幼稚園生活はすでに十年になるうとしていた。あれからまた十年経た今、保育について次のように思っている。

型にはめようとするのではなく、ひとりひとりをそのままで受け入れ、そこから始める教育、そこには「おちこぼれ」という意識は存在しない。おさえつけたり、小手先で動かそうとしたりしないで人間と人間のつき合いをしたい

し、子ども同志にもそうした体験をさせたい。具体的な多様な経験をできるだけ多くさせたい。自らしたい事があり、そこにかかわり、試し工夫しがんばりやりとおそうとし、友達とのかかわりにおいて自分が出せ、そこでの問題を自分達のこととしてのりこえようとするのであってほしい。こうした中で、喜び悩み戸惑い満足する気持を大切に受けとめ支えてやりたい。ひとりひとりを大事にしようとする三十人居れば三十通りの生活があると考えたいし、一方でクラス集団をよりよく育てたい——と。

しかし、今もまだ迷いの連続である。止めようか続けさせようか、何を思っているのかどう言うべきかと迷うし、これまで全く気にもならなかった事がある日突然気になってくることもある。何はともあれ子どもたちの様子を一日の流れにそって書いてみる。

#### 四歳児・11月21日（火曜日）の記録から

「おはよう」と次々に保育室へ入って来る。九時十五分、かばんをつけたまま、おしゃべりをしている子どももいるが、ほとんどが持ち物の整理をすませ着替えて自分のした

いことへかかわっている。空箱で作っているグループ。ブロックを組み合わせているグループ、外で追いかけたり追いかけられたり走りまわっているグループ、絵本をみている子など。

和恵と妙子が、ねずみの面をつけて、つみ木を組み合わせ電話を持ちこみ家づくりをはじめ。側にごさを敷きテーブルを置いて妙子が「これでいい？」と和恵に言う。和恵はうなずいてその場を離れ仲よしの利奈へ近づき「利奈ちゃん遊ぼ、利奈ちゃんのところもあるよ」と手をひっぱるが来ない。和恵はあきらめて、ひき返し、「だれかよせてあげたいな」と言う。妙子が「ひとりぼっちでつまんない」と言うが和恵「ひとりぼっちじゃないの、二人ぼっち二人ぼっちと言いなさい」と言う。二人はまたつみ木を動かして家をつくるが、妙子は手を休めて他の友達の方をぼんやり眺めていることが多い。和恵は一生懸命つくる。壁のように並べその上に板を渡そうとするが届かない。組みかえてもう一度置く。今度は届く。そこへ妙子が来て、「これ、ピアノよね」と弾く格好をする。和恵「ばかね」妙子「お屋根よね」和恵「うん」……。

いつもいっしょに行動する利奈、この頃時々逃げるこ

がある。三人の閉鎖的なグループが他とかゝられる機会になるかもしれないと思う。

前日、包装紙を切つて花づくりをした佳子「お花つくるから紙ちようだい」と要求する。場をつくり、糊・はさみを出し他の六名の女の子達と話しながらつくる。糊の使い方がうまい。細長い紙を輪にして花びらにする子、短く切つてそのまま花びらにする子、輪つなぎのような花、八重、一重、大きい花、小さい花とさまざまである。暢が「ほくもつくる」と来る。彼は細長い紙を長くつなげ「ほら」と得意げにみせ、しばらくつなげることに夢中であつたが、やがて花をつくり始める。

誠一が「絵がかきたい」と言う。画板、画用紙、絵の具を用意し、かく。今日はSLでなくブルドーザーである。終わるとそのまま逃げる。気の向くままにつっぱしり、他に耳をかさない彼、片づけにおいても自分は片づけようとしなない。少々強引に片づけることを要求してみようと思ふ。しぶしぶだが片づけた。

宗近が「ラーメンやがしたい」と言う。場をいっしょにさがす。宗近と裕資、テーブルに向き合つて座り粘土をまめる。裕資はひだ状にした粘土を、スチロールのどんぶ

りの底にあけた穴へとおそうと夢中、なかなかとおらない。やっとなおったと思うとするとと抜け落ちる。粘土の片方をテーブルにくつつけてとおすことに思いつく、成功、ニコツと笑ふ。そんな彼に宗近は「ラーメンや」と言い続ける。裕資には通じない。ラーメンやへの援助をしようかなと思つているところへ幸太郎が「よせて」と来る。宗近は即座に「いや」と言う。幸太郎は「何かいね、幼稚園のものよ、悪いねえ」と口をとがらせてぶつぶつ言い続ける。宗近は「いや」と言いながらも幸太郎のぶつぶつに応じ結果的には三人がそこで遊ぶことになる。

美しく色づいたもみじを陽子が私にくれた。他の遊びを傍観している明子に「これでおかしができないかねえ」と言う。「できる」と言う。机を出し、粘土で葉を使ったおかしをつくる。明子もつくる。「何してるの?」「わあ、きれい」「これもみじでしょ」「私もしたい」と人数が増す。場が狭くなり広げる。「お店にしよう」「ケーキやさんよ」とつくったケーキを机の上のつみ木の上に紙を敷ききれいに並べる。大きい丸形の上に小さな丸形をたくさん並べ等間隔にもみじの葉を置いたもの、棒状のものを渦巻きにしその上に葉を置いたもの、粘土の中に葉を巻き込んだもの

など、私など思いもつかないようなおいしそうなケーキが  
沢山できた。「今度はねえー」と考えながらつくる。もう  
私は居てもいなくてもいい存在である。

暢が「これください」と来る。加奈子が「はい十万円で  
す」とすぐに応じる。「はい」とお金を出す真似、受けと  
る真似、食べる真似「ああおいしかった」と言う。加奈子  
が私のところへとんで来て「暢ちゃん本当に食べちゃっ  
た」とくっくっくと笑う。葉を本当に口に入れたらしい。

利奈来る。「ごめんください」「はい」と明子と華絵子が  
応じる。「ケーキください」「はい、こちらは十円こちらは  
百円です」「お金がない」「あのね、小さい紙でいいんよ」  
利奈紙切れをさがして持ってくる。「はい、お金」「はい、  
ケーキ」「あのう、ちょっと包んでください」「はい、かし  
てください、お待ちください（包んで）お待ちせしました  
ありがとうございます」「さようなら」利奈は、別のコ  
ーナへ行きそっと包みを聞く。ケーキを手にとり眺めて  
「きれい、きれいだな……」と言いままた包む。他の子ども  
達もお金を作ってはケーキを買いに行く。

誠一が猛然と入って行き「ごめんください、お酒くださ  
い」と言う。陽子が「お酒はありません」と言うと、並べ

てあったケーキをぱつと床に払い落として逃げる。瞬間の  
ことで、みんな安然としていたが、後もだれも誠一に何も  
言わない。また彼が入って行きそんな気配を感じ、私は、  
このケーキやを彼にこわされたくないと思い「先生、ガー  
ドマンになるう」と入る。すぐに誠一が来て「店の人にな  
りたい」と私に強く要求する。他の子へ言うように言うが  
それはしないで私に要求し続ける。他の子は不安そうな表  
情で事のなりゆきを見守っている。どうしようと迷ってい  
る私におかまひなく彼は強引に店の中央に座りこむ。そし  
て、「いらっしやいらっしや千円、千円」と叫ぶ。だれ  
も応じない。すぐ出て行く。

幸太郎がスチロールの皿を抱き合わせるようにしてつく  
った財布に、かまぼこ板のお金を入れ、ニコニコして店に  
来る。「ごめんください、ケーキください」「はい、どれで  
すか」と話しているときまた誠一がくる「ごめんください、  
この店をください。お金はいっぱいありますから」と大声  
で言う。彼はかまぼこ板に 1000000 と書いたお金をふ  
りかざしている。幸太郎のスチロールの財布をみつげ奪お  
うとする。「いや」「かせ」「とくみ合う。私が近づくと  
誠一は逃げる。大金を置いたまま。そのお金をみつけた陽

子が加奈子に「これねえ、ものすごく高いお金よ」と言う。「大事にせんにゃ」「うん、この中に入れとこ」とひそひそと話し包装紙の間にしまいこむ。

すでに10時25分、部屋の中は、ねずみの家、ケーキヤラーメンや、ブロック、つくる場といっばいに広がっている。11時降園なのでそろそろ片づけなければならぬ。このまま置いておきたいという要求を受け入れ大まかに片づけることにする。

一日の流れが、いつもこんな風だというわけではなく、時間を切ることも一斉にすることもある。観る人は「自由保育ですね」「こんなだと運動会などどうなさっているのですか」などと言う。なぜ、自由保育、設定保育などと決めつけるのだろうか。自由保育と自他とともに認めている園を参観した。考え方がある部分で私とは、全くちがっていた。いろいろな形態を必要に応じてとればいい。

幼児期に仕上げが大切であると言われる。しかし、仕上げの内容や方法になると、その考えている事は同じではな

いようだ。親や教師の言うことを聞き、すべてきちんときることを最初の段階から要求し、ここがまんずすることをも意味づけようとしているように思えることが多いが、そうだとすると、経験の幅だ、自主性や創造性を培う場もうんと狭くしてしまうことにならないか。幼児期に型はめてでもしつけておきたいことは何なのか。

仲よくするとか、生き者をおかわいがるというようなこと、それをめざす過程では、けんかをしたり、意地悪をしたり、結果的に生き物を殺すことになったりというようなことを認めた上での援助が必要な時もあると思う。このところをきれいごとですませようとすると形だけであったり、ごまかしたりするのではないか。

何か目に見えることを教えてほしい、できるようにさせてほしい、自分の子が他よりもすぐれていてほしい、いい子と言ってほしいと願う親の期待の中で私のような保育をしていると、その意味するところや必要さを機会をみつければ話し続けなければならない難しさを感じるが、枠にはめた経験があるがゆえに今の保育を大切にしたいと思う。

(山口大学付属幼稚園)